

当院回復期リハビリテーション病棟における認知症患者への運動器リハビリテーションの効果  
—Functional Independence Measure によるアウトカム評価に着目して—

医療法人春風会 田上記念病院 リハビリテーション部

○川上剛 小田博重 中村浩一郎

## 【目的】

回りハ病棟に入棟する運動器リハ対象患者には認知症を合併している症例もあり、認知症症例ではリハビリの効果乏しいとの報告がある。今回、当院回復期リハ病棟に入棟した運動器疾患認知症患者の治療効果について、FIMに着目して後方視的に調査を行ったので報告する。

## 【方法】

対象は平成28年4月1日から平成30年8月30日までに、当院回りハ病棟を退棟した運動器疾患患者50名。カルテより在院日数、転帰先、入退院時のFIM得点を抽出した。認知症の有無についてはMMSEとHDS-Rにて判断し2群に分類した。2群間のFIM得点の比較についてはMann-Whitney U検定、認知症群のFIM下位項目の比較については多重比較検定を用い、有意水準は5%未満とした。

なお本研究は当院倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## 【結果】

認知症群は39名、非認知症群は11名であった。在院日数、運動FIM利得、運動FIM効率については認知症群と非認知症群に有意差を認めなかった。認知症群のFIM下位項目については入退院時運動FIMが食事、整容の項目が高く、階段、移動が有意に低かった。入退院時認知FIMでは表出、理解が高く、記憶、問題解決が有意に低かった。FIM利得については移動、更衣の順に高く、食事、整容が有意に低かった。実績指数との関係については、運動FIM利得、認知FIM利得に相関関係は認められず、在院日数が有意に相関していた。

## 【考察】

認知症と運動器リハの治療効果に関する研究は多く報告されており、歩行能力や転帰先、在院日数などに関与するとされている。今回の調査結果ではFIM下位項目において、運動器リハの核となる移動能力と認知症の中核症状である記憶に関連する項目に大きく影響していた。認知症症例に対しては認知症レベルを考慮し、より早期に在宅復帰への環境調整を行う必要がある。